



杉並景観録 Keikam-Roku SUGINAMI Keikam-Roku

第六号



●発行日 平成12年3月1日
●発行 杉並区都市整備部まちづくり推進課
TEL.3312-2111(代) 内線3515



時代

を越えて

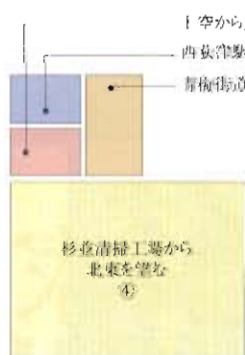
杉並には、縄文時代以前から人々が生活して来ました。平安期には既に「阿佐谷」や「高井戸」の名が存在していたようです。江戸時代になると、江戸に從属する形で基礎的なまちの構造ができあがりました。

「杉並」の名が登場するのは一八八九年。現在の阿佐谷や高円寺付近のいくつかの村が統合されてきた村が「杉並村」と呼ばれました。その後、周辺地域と合併して「杉並区」が誕生したのは、一九三二年のことです。関東大震災や戦災で焦土となった下町から、被害が比較的少なく、農村地域を抱えていた杉並へ急激に人口が集中しました。また、中央線に駅が新設されたことで東京の中心地に直接アクセスできる利便性も手伝い、杉並区は「のどかで閑静な住宅地」、そんなイメージをもたれることの多い「住宅都市」へと姿を変えていったのです。

2000年。

21世紀を目前にして、私たちのまちづくりは、これからです。

① 空から見た阿佐ヶ谷駅周辺(昭和初期)
② 西武池袋線前 商店街(昭和初期)
③ 岸板町駅前通付近(昭和12年)



杉並清掃工場から
北東を望む

クスノキは 元気の源

東京女子大学出身で、現在ノンフィクション作家として活躍の中島みちさんに、学生時代の思い出を語っていただきました。



女子大時代の思い出
敗戦後の学生時代、楽しみ
のひとつは、放課後、女子大

通りの蕎麦屋「田中屋」さんできつねうどんを食べながら、おしゃべりすることでした。そのお金は、西荻窪の駅前から女子大前までのバス代を節約してひねり出したものです。

二回乗るのを我慢すると食べられませんでした。大学の講義が休みになると、級友たちと善福寺池の和船に乗って、よく語り合いました。この土地のしつとりした、たたずまいに魅了されて、結婚後、善福寺に引っ越

「善福寺公園があつて今の私がいる。」

してきてしまったほどです。当時は女子大がよくまちに溶け込んでいた、と語る。その中でも善福寺公園は学生時代の思い出と切り離せない。

クスノキとの出会い

善福寺池のほとり、浄水場の堀きわに、大好きなクスノキがあります。大きな幹に枝が伸び伸びと池に覆いかぶさるほどに広がっていて、その下に立つだけで甦ったように元気が出るんですね。いつも弁天様と、このクスノキに、感謝のお祈りをするんですよ。三十年前、私が乳がんの手術を受けるときにも、前日にお祈りをしに来たのを覚えています。

変わらない景色は、かならず人を和ませてくれる。善福寺公園もそんな景色のひとつだ。

プロフィール
中島みち／一九五三年東京女子大学英文学科卒業。ノンフィクション作家。第42回菊池寛賞受賞。著書に「奇跡のごとく―患者よ、がんを闘おう―」新々、見えない死―臨死と臨終―とともに文藝春秋がある。



1: 礼拝堂のパイプオルガン
2: 昭和10年頃の英語サークルによる野外劇
3: クリスマスの時期イルミネーションで飾られる本館



緑豊かなキャンパスに、 白亜のチャペルが映える。

東京女子大学

大正七年に「すべて真実な」という新約聖書の一節を掲げ、東京女子大学は創立された。昨年迎えた創立80周年を記念して、新たに図書館などが落成。21世紀を目前に更なる一歩を踏み出した。日々の礼拝には、パイプオルガンが美しく鳴り響く。こんな穏やかなキャンパスには、ここに至るまでいくつもの歴史が刻まれてきた。戦時中には本館やチャペルに迷彩が、学園紛争の高まりの中ではバリケードが築かれた。移り行く時代の中で本館裏の林には、今も武蔵野の面影が残る。四季を通じて与えられる自然の恵みに、先人の愛を思わずにはいられない。

『お地藏さんのいる』

風景

阿佐谷南一丁目

JR阿佐ヶ谷駅南口にあるショッピングモール、パールセンター。七夕まつりで有名な、こじんまりとした店の並ぶアーケードを南へ七、八分程進むと、お地藏さんと庚申様（青面金剛）の姿が。パールセンターは、その昔「権現みち」と呼ばれる参道でした。北は「子の権現」こと真言宗円光院（練馬区）、南は堀之内妙法寺に至り、多くの人々がこの道を通ってお参りしたのです。お地藏さんも庚申様も、元禄四年（一六九一）に、当時の阿佐谷村の人々の発願によって建てられました。どちらにも「二世（現在と死んだ後）にわたって安楽であることを願う」と刻んであります。それから三百年が経った現在、お地藏さんの顔は、歳月と共にその表情を窺うことは出来なくなりましたが、今もなお、道行く人々を見守り続けてくださいます。その前には、いつも地域の人たちのお供えする花が絶えません。



すぎなみ／ひと／まちなみ



SPECIAL EDITION



駅 北口を出て左へ折れる。朝のバス通りには、女子学生がひしめき合って道を急ぐ。その名も「女子大通り」。道なりに西へ歩いておよそ15分。うっそうと茂る緑のあるキャンパスへ行きつく。

さらに裏手へまわると、善福寺公園だ。春夏秋冬、草木が豊かな色彩をたすさえ、来る人の心を和ませている。池には鯉が遊び、水鳥がしばし憩う。都会の西に、たしかに自然は息づいている。

西荻窪 知る人ぞ知る骨董品のまち。タぐれにもなると、やわらかい電灯の光りに浮かび上がる品々が美しい。何を縁にしてか、昔から骨董品だけでなく古本や古着を扱う店が軒を連ねている。その辺り一帯の趣は、古きよき学生街といったところ。年季の入った看板を掲げるのは、アマチュアのバンドが演奏するスタジオやカフェのある古本屋など。若者の姿がいつも絶えない。

路地へ一歩足を踏み入れると、住宅街が前に広がる。そんなまちは他にもあるかもしれないが、しばらく歩いてみると、このまちなみのよさが分かってくる。何げないまちなみに、雰囲気やけにいいお菓子屋や喫茶店が彩りを添え、ほんの小さなレストランに、一流の味を見出すことができる。回り道してお店を見つけたら、いつも思いつくのは「また、散歩しよう」。

西荻窪 善福寺界隈

NISHIOGIKUBO & ZENPUKUJI

懐かしい楽しさに満ちたまち



家 路を急ぐ人で駅がにわかには気がつく頃、屋台を思わせる焼鳥屋に灯がともりはじめ。客はビールケースに腰を据え、酒を片手に話が始まる。夜になってもこのまちはこだわりの店のあることで知られる。こじんまりとした外観は、派手に客の目を引くことはないが、中をのぞくとこの店も常連さんで埋まっている。

新宿、吉祥寺を近くにはかえたその中間部、休日は中央線も止まらないが一度住んだら引越せないとい人はいう。外から見ても分からない、おもちゃの詰まった宝箱。そんな懐かしい楽しさに満ちたまちが西荻窪である。

N E 杉並景観録 W S



大田黒公園 記念館の ピアノ蘇える

昨年11月14日にフルートコンサートが大田黒公園記念館で開催され、深まる秋の庭園に優雅な音色が流れました。

コンサートでは、大田黒元雄氏の遺されたピアノも演奏されました。このピアノは19世紀末に製造されたもので、ボランティアの方々の協力を得て調律されたものです。

ほぼ一世紀の時を経て、記念館に集まった区民の皆さんにお披露目されました。

東京電機大学 公開授業 八木澤先生にきく

杉並区を題材にした東京電機大学公開授業（建築パフォーマンス）は今年で5回目を迎え、学生の発表が1月17日に行われました。当初から公開授業に携わり、今年度で同大学を去られる八木澤先生にお話をうかがいました。



プロフィール

八木澤 壮一

東京電機大学工学部建築学科教授
火葬場研究の第一人者。共著書に「火葬場」(大明堂)などがある。本年4月より共立女子大学家政学部教授。

建物は何のためにつくるのか、何が必要なのかを机上ではなく、まちへ出て考えることがこの授業の目指すものでした。

これまでの授業を通して、教師対学生という概念から離れ、地域に学ぶことで自分で考える習慣がついたよ

うに思います。発表の場においても学内から離れ、地元の方々に前して緊張感のある貴重な体験を得たように思います。

この授業をきっかけに、まちづくりにかかわる仕事で活躍している卒業生も多くみられます。

まちかどスケッチ



西萩房

面狭敷敷地の一角、表通りから一歩入ったところにあった、共同井戸を囲う様に、木の板を横に張った下見板張りの家の建ち並ぶ。井戸の手押しポンプはすでに無いが、足元には「レクリートの流し水」があった。かつては、洗う水や水汲みに来た人がべちゃべちゃと話しをはずまっていた筈だ。思い浮かぶ。

建物の一階には、木の格子がはめられて、外からの視線を切りながら風を通すくふうがされている。玉子の格子戸や、縁取りが加わって、心もなごみます。妙に身近な空間が演出されている。

共同井戸のあちこち

第7回 杉並「まち」 デザイン賞 候補募集

区内の「まち」で見つけたすてきな建物やまちかどなどをお知らせください。皆さんの推薦をもとに選定し、表彰します。自薦他薦を問いません。



推薦対象

- 現存する建物（住宅・店舗など）
- 工作物（看板・柵・ベンチ・植え込みなど）
- 地域活動（まちなみを魅力的に演出している団体など）

推薦方法

- はがき、電話、FAXで、まちづくり推進課まで下記の事項をお知らせください。
- 推薦する建物などの所在地、住所
 - 推薦理由（簡単なコメント）
 - あなたの住所、氏名、電話番号

締切

平成12年5月末日

発表

平成13年2月頃に広報、リーフレットでお知らせします。

編集後記

「まち」という小共同体での大冒険であります。角度を変えると、こんなにもあたらしい世界が広がるのかと。編集につきまは、素敵な人々との出会いに支えられましたことを、この場をお借りして御礼申し上げます。



「東女五版」を知っていますか？

私たち東女五版編集部では、今、女子大生の間で話題になっていることを取り上げた新聞を年8回発行しています。定期購読等ご希望の方はご連絡下さい。



杉並区善福寺2-6-1
東京女子大学内 東女五版編集部